

阿波
津
乃
日記
五
編

魚
虎
記

^13
3906
3





13
3906
3

重寶記

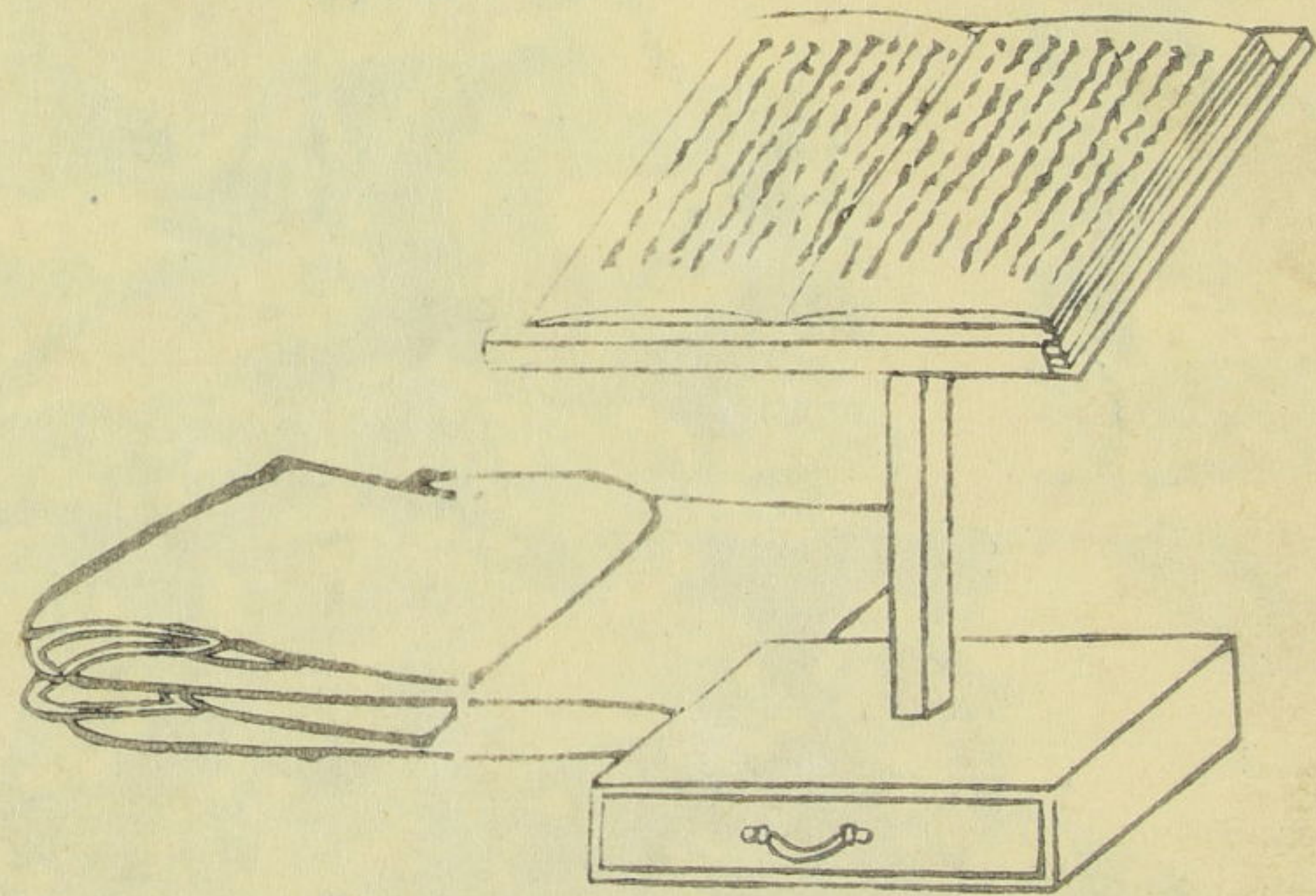
書物衣服ふあやましく
油をみたるあは屋根の
漆灰を取て粉と
あて振り

其裏よりゆ

油をぐくぬけて

跡つどは何より

手軽き妙法あり



御所奉公東日記五編序

畠山重忠の妻美佐保の方夢ふ重忠の前生ハ楚國乃
吳奢あると見る介あふ重保ハ嫡男の伍尚みて遊女腹
の重慶ハ吳子昏るるべりのこそ此由縁あるのみあらま
重忠原ハ平家みて治養四年源家みはつる吳奢楚國
の良臣あり一が譏者の為小嫡男と死を一時みする重忠
重保の死も二日を隔む重慶むら僧とありて世み残て父の
仇を忘れぬハあは吳子昏日とりみても可あらん哉

嘉永七甲寅年初春新板 三万亭應賀誌

高山居士
本多次郎近常
橋沢六郎
成清

此兩人の
重忠の愛
臣の
あて



一と忠美を尽し
二俣川合戦の
手勢百千交

討死の
大軍を
鎌倉の
重忠の
討死の
一族諸
共にお
自殺せり

重忠の奥方
美佐保
北条時政の
先妻の



律師榮西
洛東建仁寺の円山
あて元久二年鎌倉
下向てあり
此僧とて
重忠父子の
菩提を高名あり
吊らせ玉ふ

終に滅亡の
後尼と
成り
不和あり
深く憎まれ
継子あり
娘あり
牧の方あり



於宇須

阿波の馬の
部屋勤め
不義の事
下られ
密使の

松六といふ者の
妻とるなり

三木依郎重門
京都の本店より鎌倉へ
下りて年季を勤め
番頭みちて遊女を
好み於蜘蛛とて
只人小欺ま茶屋
女をかまひて終ふ
身の咎を頭へせり



密使の松六

異名を鬼松と号諸国の
密使を以てするあり



於蜘蛛又一名
於河童

鎌倉雪の下に住賣女の
中立を以て又諸家の奉公人
妾の世話を業とする悪
婆らあり諸人を究へ
とある以てこの二ツの
異名を呼とるなり



本物あり
於白の夫ハ
是あり

身を化
子分
子分
数多あり
人の
知れり



▲このま
羊か
みよのまの
はまの正使
けきま
つらま
のま
よまの
このま
まを

よまのま
元々まの
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま

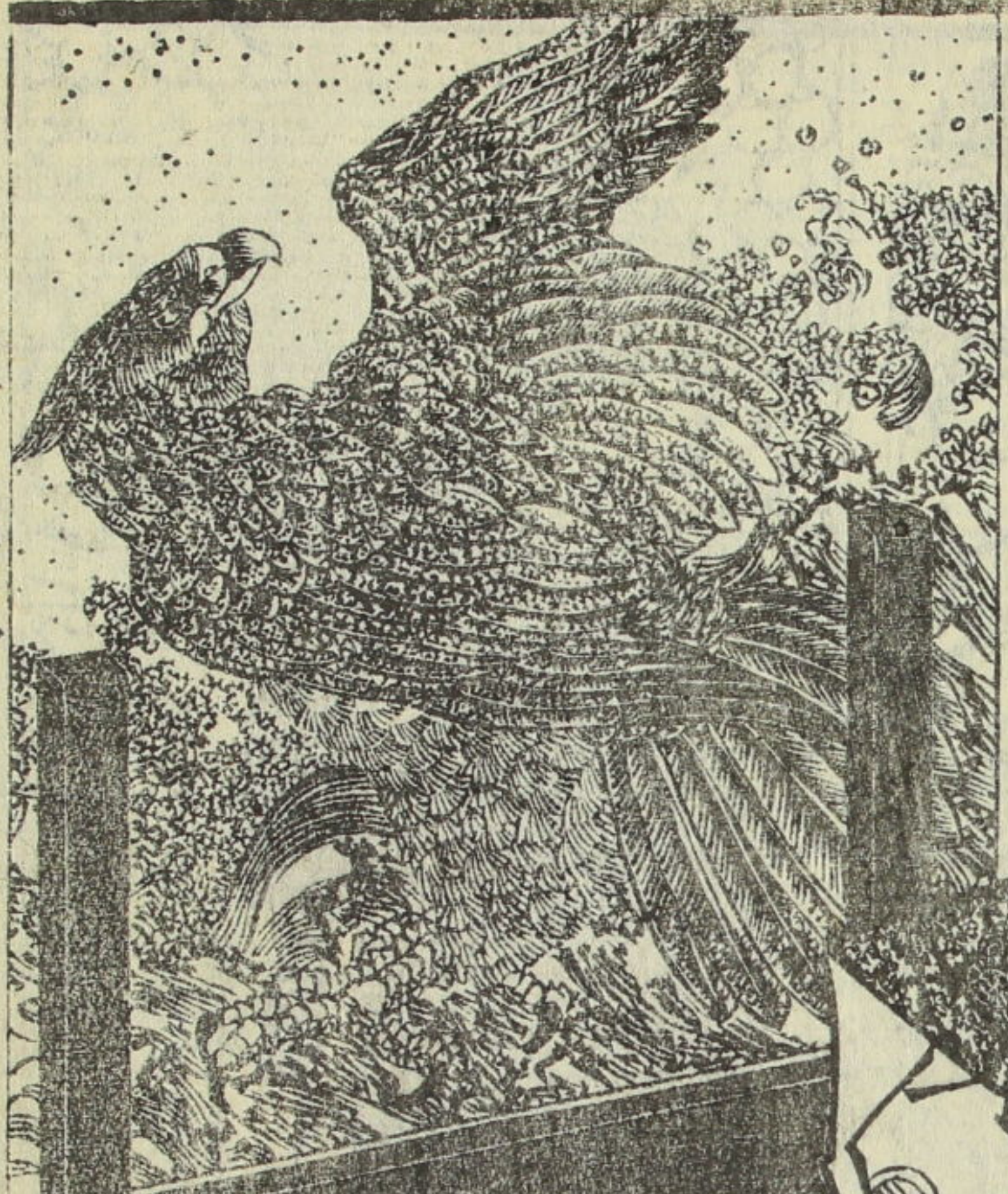
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま

まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま

まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま

まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま

まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま
まのま



Vertical columns of handwritten Japanese text (kuzushiji) surrounding the illustrations. The text is densely packed and follows the traditional right-to-left reading order. Some characters are larger and bolder, possibly indicating emphasis or specific names. The text appears to be a historical or literary record, given the page header '東日記五'.

つらき ちのちのち
あつちのつらき
せむしとてそく
そらみきつなりそ
ちろとちろふへん
せしがやあてり
をあげて



あつちのつらき
せむしとてそく
そらみきつなりそ
ちろとちろふへん
せしがやあてり
をあげて
あつちのつらき
せむしとてそく
そらみきつなりそ
ちろとちろふへん
せしがやあてり
をあげて



あつちのつらき
せむしとてそく
そらみきつなりそ
ちろとちろふへん
せしがやあてり
をあげて
あつちのつらき
せむしとてそく
そらみきつなりそ
ちろとちろふへん
せしがやあてり
をあげて

Vertical text columns at the top of the right page, likely serving as a preface or introductory text for the scene below.



Vertical text columns at the bottom of the right page, providing commentary or dialogue for the scene.

Vertical text columns at the top of the left page, continuing the narrative or providing context.



Vertical text columns at the bottom of the left page, providing commentary or dialogue for the scene.

己未春錦橋堂新

寢小便大奇藥
 一包代
 三百銅
 ねんじんののり
 りんごを煮た
 女にも一色あて
 治る良方あり

清淨 白妙
 一包代
 三百銅
 精製
 まろい入用あれは
 白くあつゆのゆたの

御藥 齒散
 大包代百銅
 小包代三銅
 一物のを一うたて一うたひ
 一血のり一えんごをまき
 能く用かすのちあつゆはくちあつひ

庄
 地本 江中橋廣小路
 山田屋庄次郎

女用文章箱
 中本形 全冊
 東菴京山作

雛鶴笹湯壽
 紅搦 全冊
 一冊 一陽齋草堂國画
 山東菴京山作

源氏一猛圖會
 全同 撰
 冊同 重

紅梅百人一首
 半紙本全一冊
 女用文章入

美玉百人一首
 中本形全二冊
 女用文章入

Vertical text columns on the top right page, likely a preface or detailed description of the items.



應賀作芳虎画

Vertical text columns on the bottom right page, likely a preface or detailed description of the illustration.

万真應賀作
一猛齋芳虎画



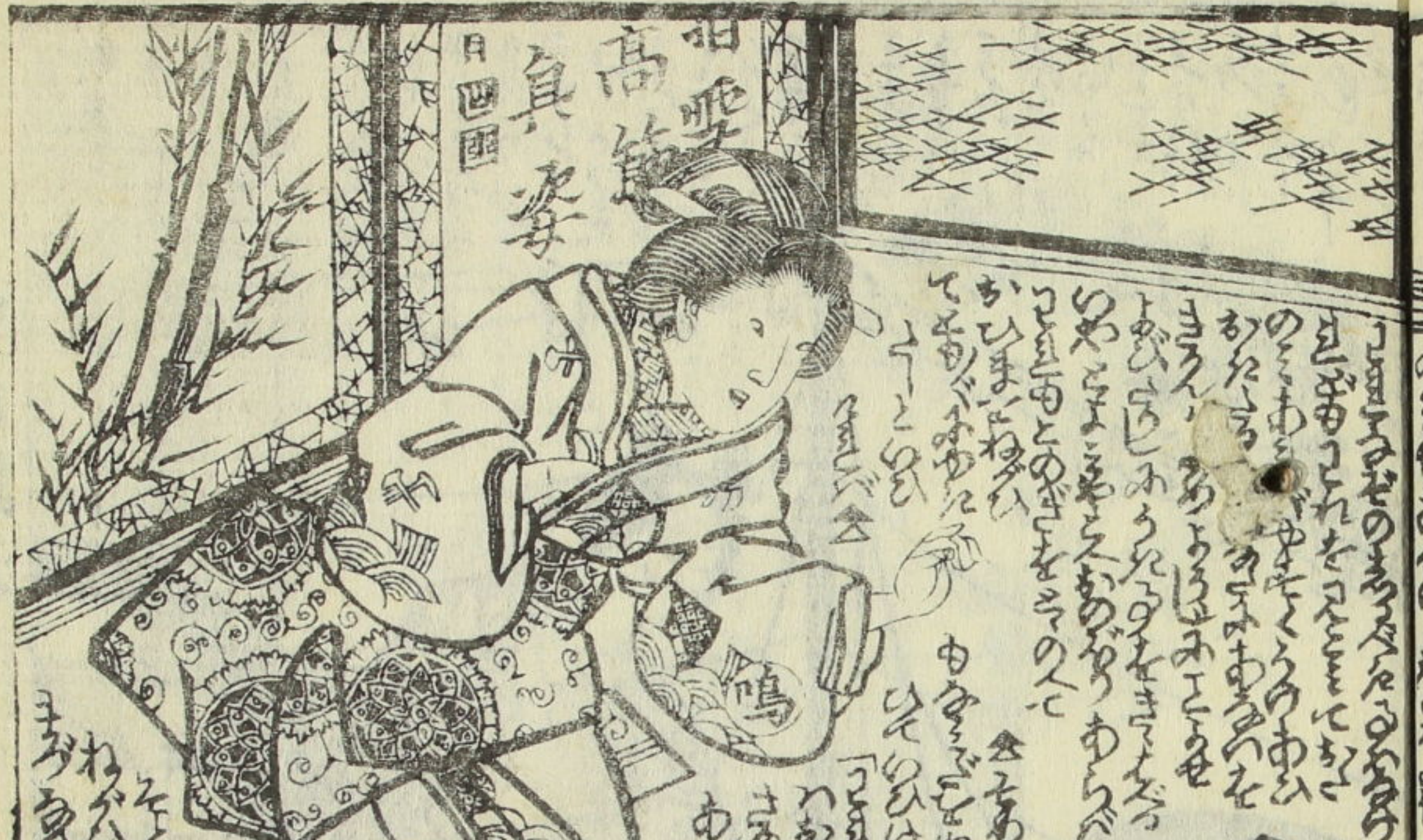
下

錦橋堂壽梓





Vertical columns of handwritten Japanese text on the right page, including a large block of text at the bottom.



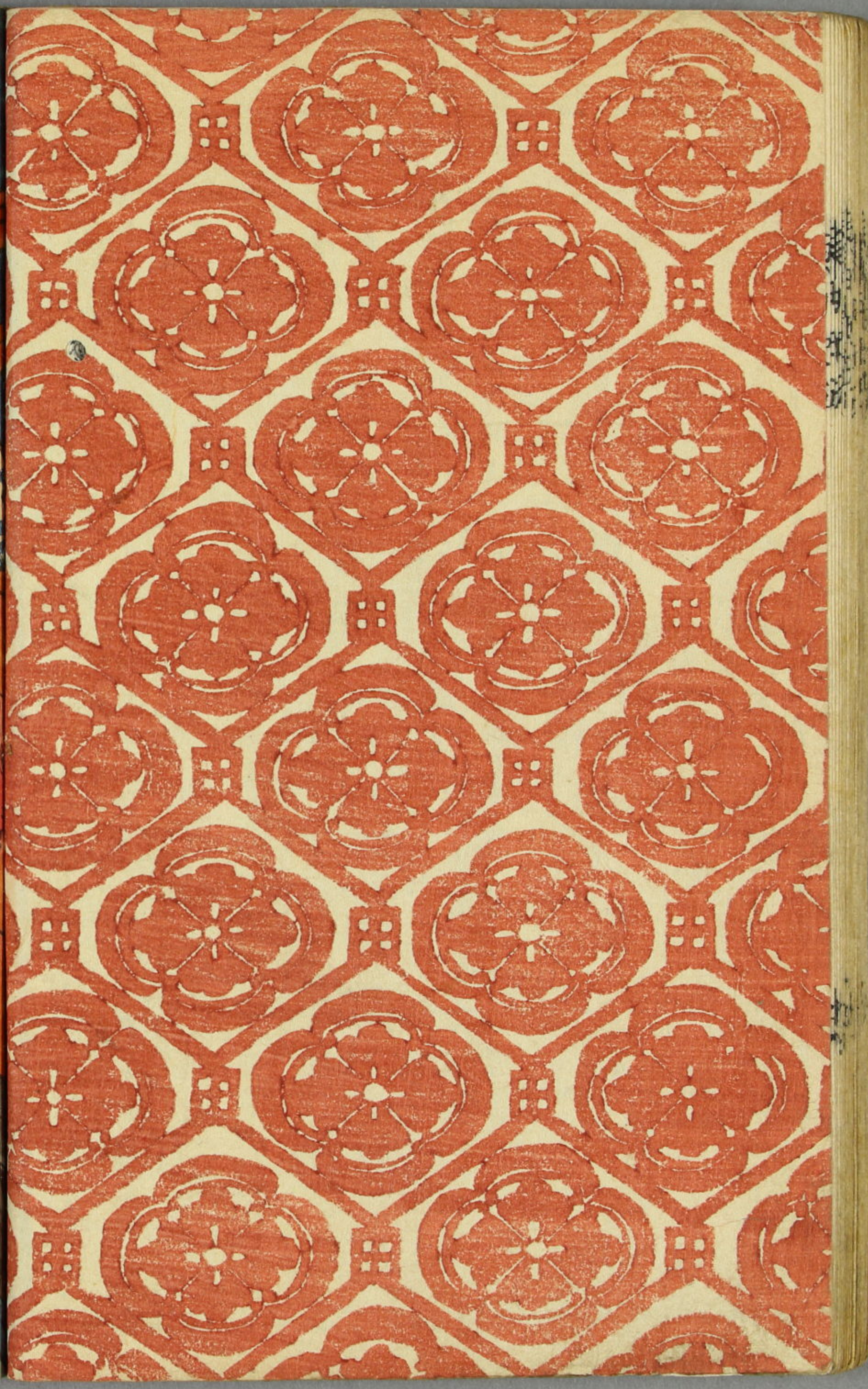
Vertical columns of handwritten Japanese text on the left page, including a large block of text at the bottom.

高野 眞姿 日四



万亭應賀作

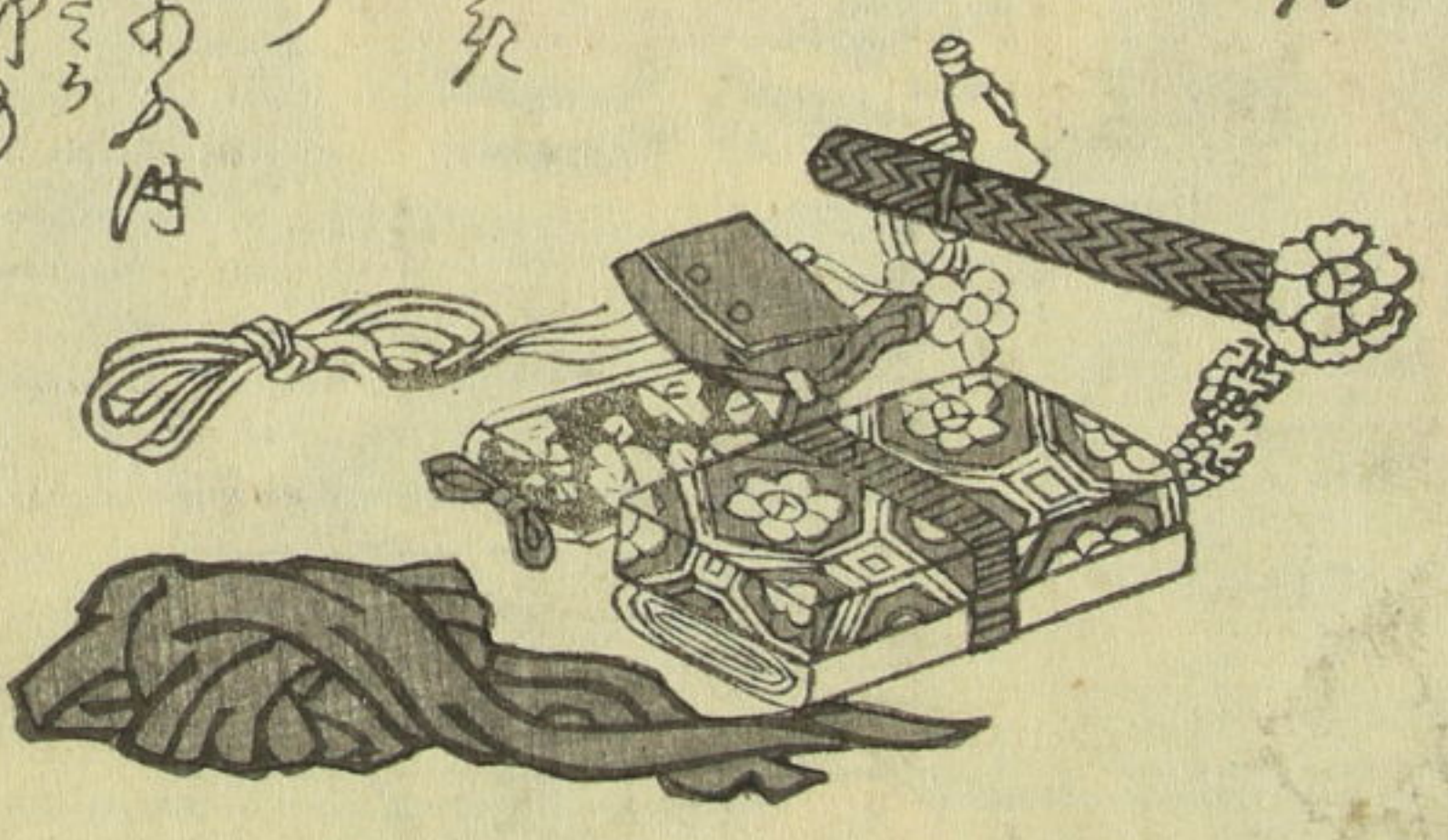
上



重寶記

志 都て使所へゆくも懐中のけりもちろん
あゝのまのつみ提たるののめり置て
ゆくへもあつみも女ち揃うがぬ
守らるるなど心づくべし又けり

細き麻縄はらうのちうみりつべき
この鼻緒をぞきれるとたふ用立てあり
我がたあむらうあむらう人々このあんよあふ
あふらるるその裏みえらるるべし萬事交際の
この大益成るよふたあふらるるがけあむらうのみ



御所奉公東日記六編序

畠山重忠元久二年六月十九日諛者稻毛重成が為み菅谷の
館を癸向一廿二日午の刺武刃二俣川み着子息重保の誅せ
られしを開始めて奸者を深く憎めど前業の報ひを悟りて其言
訳をせば百三十余人の者潔く鶴ヶ峯の林下みおいて酒宴を催し
甲冑も帯び討死せし誠み四相を悟りし武士あり然れど稲毛
あはれ小人の謀み落命するハ思慮あはれみ似されとも慮直聖賢の
輩ハ小人の意ならば都て人口を疑いむから難み合といふと天
是を助くべし和田義盛の助言も通せば阿倭の為み亡びしこと
天也命也宿因ありし人悼もまごんば不可有と云

嘉永八乙卯歳初春新刻

万亭應賀誌



身白言



島山次郎
 平重忠



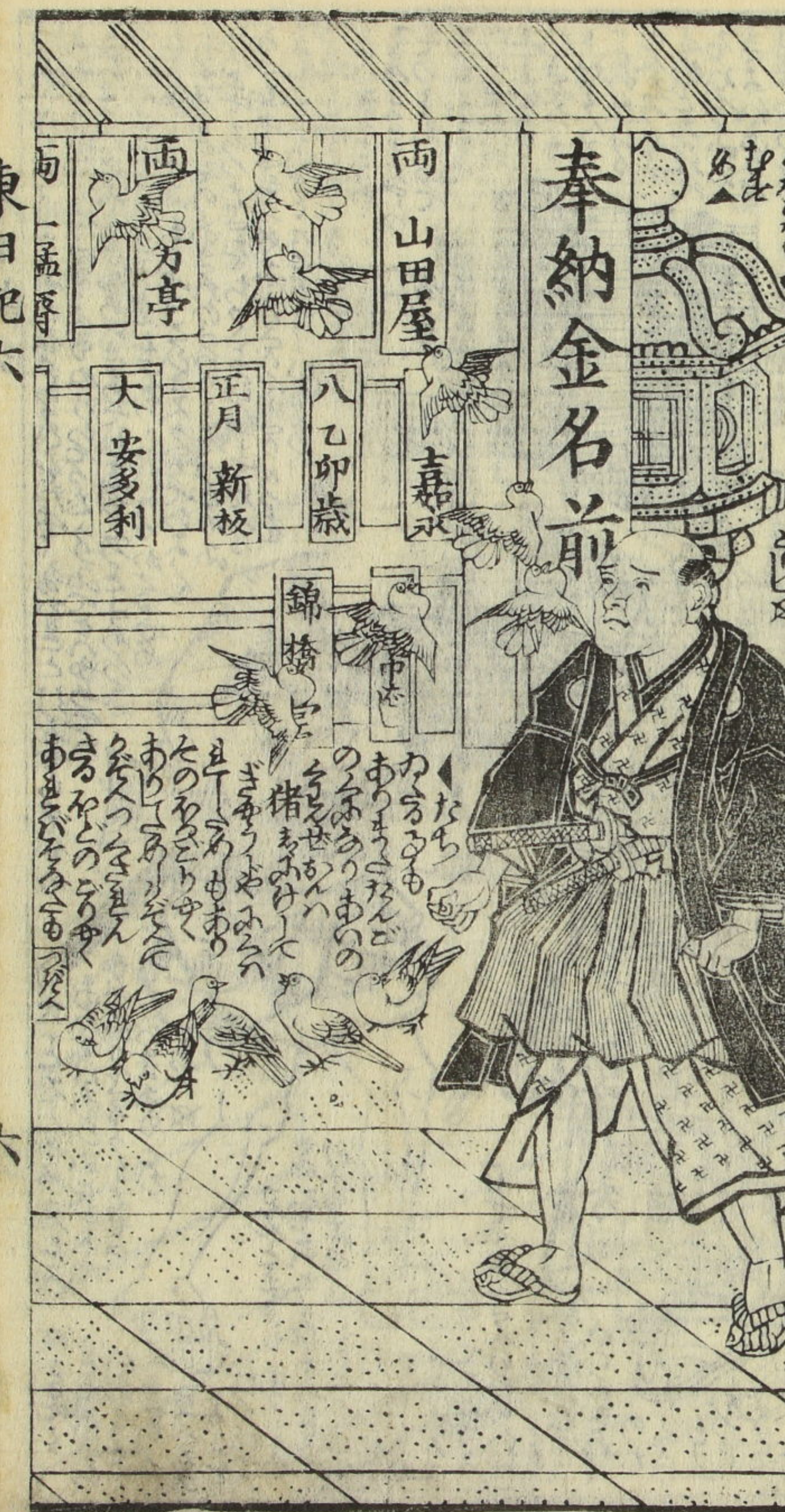
本多 次郎 常
 近 次郎
 島山 次郎
 平重忠
 武島 二
 侯 川の
 邊 霍の
 峯 の 林
 小 於
 最 期 の
 酒 宴 を
 催 せ

成 六 様
 清 郎 沢

車 忠 子 の
 重 慶 法 師



つぎに... 女... 男... 山田屋... 奉納金名前... 山田屋... 奉納金名前... 山田屋... 奉納金名前...



奉納金名前... 山田屋... 八乙卯歳... 正月新板... 大安多利... 錦旗... 山田屋... 奉納金名前... 山田屋... 奉納金名前...

東日記六編

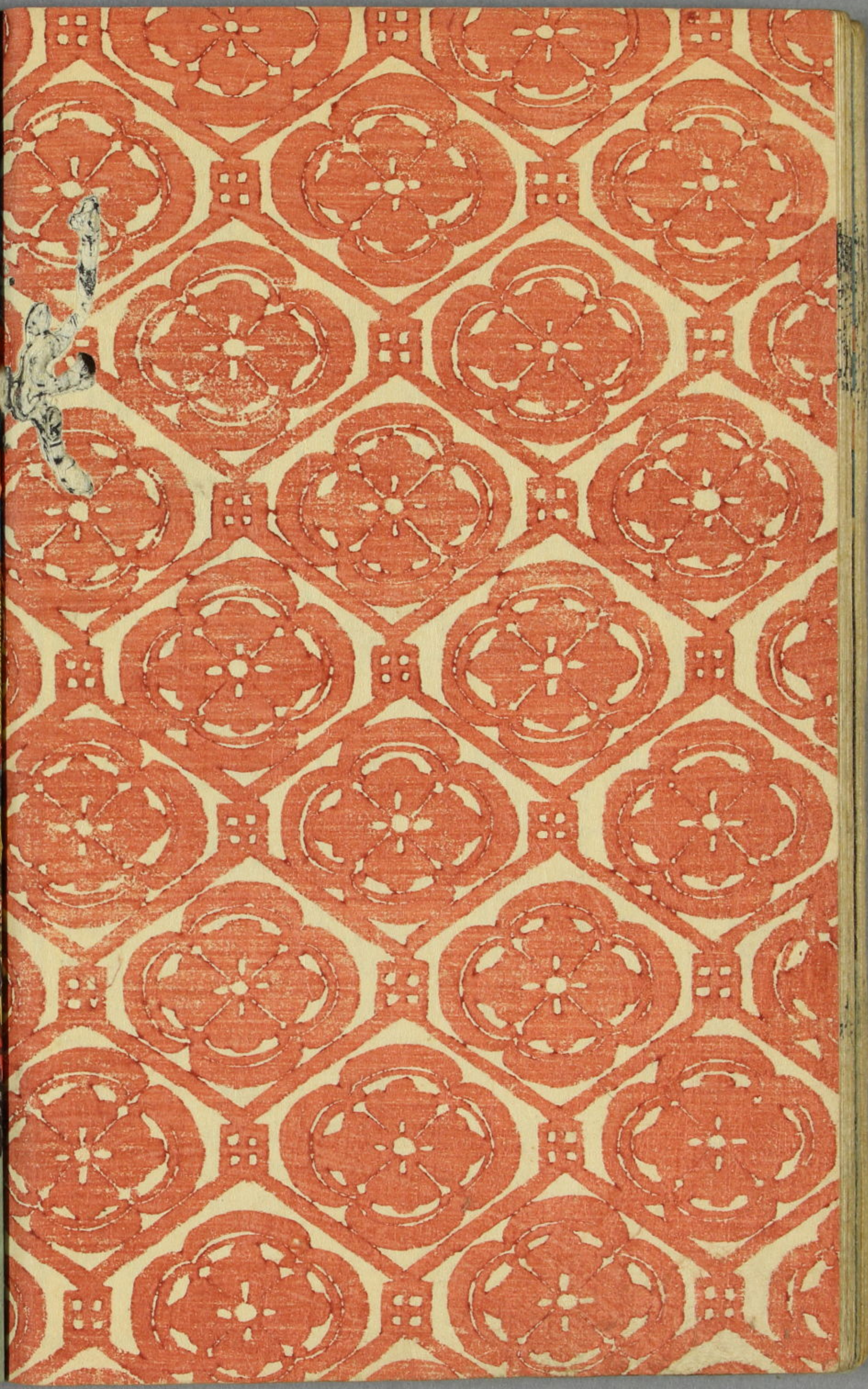
一猛齋芳虎画

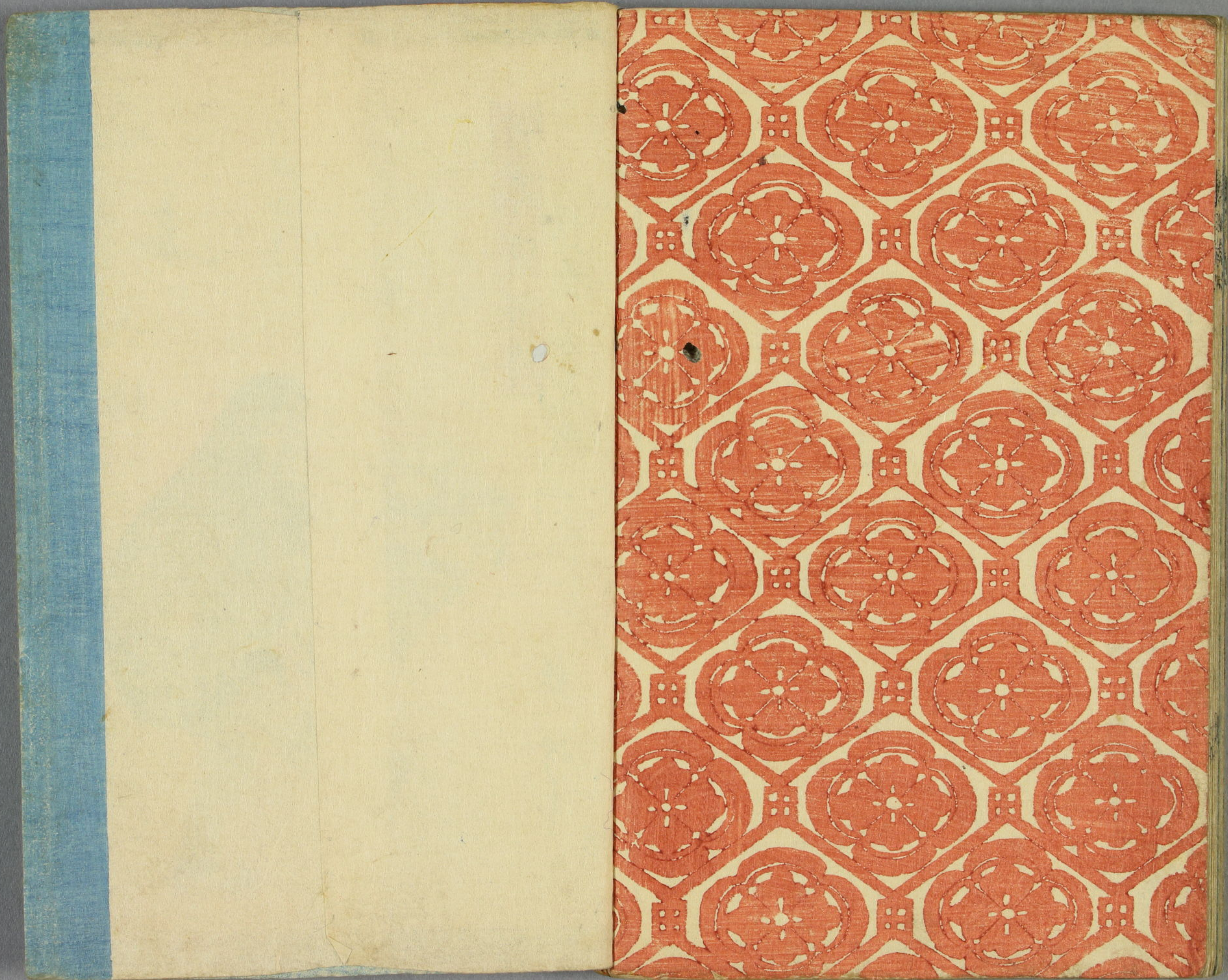
嘉永八卯年春
武易二侯川

錦橋堂梓



下





吾

妻

六編

小川

記

万亭應賀作

一猛齋芳虎画



翁
上梓